

熟塾新春講座

大阪都島区の邸宅と愛用の探訪し食器を鑑賞、コレクションについて学ぶ

関西実業界の立役者、明治財界の風雲児 藤田伝三郎氏の生涯とは

開催日時:2008年1月27日(日) 11時~15時・太閤園

講師: 藤田美術館 藤田清氏

講義: 藤田伝三郎の生涯と

藤田コレクション

講師: 藤田美術館 藤田清氏

藤田伝三郎と出会って



藤田伝三郎・・・と出会った。行きがかり上だが、ばったりと出会った。大阪市コミュニティ協会が主催する「なにわ自慢」という大阪ひと・まち魅力発見市民交流イベントの会場が藤田邸跡公園だと聞き実際にその場に足を踏み入れた時、小柄だが眼光するどい幕末から明治と日本の変革期に、日本を動かした長州出身の藤田伝三郎の姿を垣間見た。大阪商工会議所の初代会頭の五代友厚ばかりがクローズアップされるが、二代目会頭として関西電力・琵琶湖汽船・阪堺電鉄・南海電鉄・リーガル・大阪毎日新聞など今も関西経済の担い手として活躍する企業の種を撒いた立役者としての伝三郎の功績を語る人は少ない。

私自身も何度か太閤園を訪れながら、食事をしたり庭の蛸を楽しむばかりで、太閤園という建物の歴史を顧みることにはなかった。ただ、勤め先の会社で鶴見区で開催された花博の開催にあわせてイギリスのクィーンエリザベス号をチャーターするプロジェクトがあり、船長らルールを大阪で接待したいが会場はどこがいいかという東京本社の担当者からの問いかけに、迷わず「太閤園」と推薦したことがある。動く超高級ホテルを日常にする船長に寛いでいただけの場所、日本庭園があり本物の日本的な空間でサービスも食事も行き届いているので、特別な外国の方をお迎えするのだったらと即答した。果たして東京の担当者から「お座敷天麩羅にしたんだが、船長がとてもお喜びだった。大阪にもあんな素晴らしい場所があるんだね。」との返事。クィーンエリザベス号という世界を巡る豪華客船の舵を握る船長をも満足させることができる場所として「太閤園」の印象がインプットされた。箱根の小桶園や加茂川沿いの京都の藤田ホテルにも宿泊したことがあるが、その歴史を振り返ることもなく、太閤園同様快い空間で美味しい食事を頂き快く過ごした。ただ「藤田男爵はお金で男爵の位を買った」ということを聞いたことがある。その言葉が気になったが、男爵という言葉も重みも身分制度が撤回された今となっては実感がなかった。今回のイベントの会場が藤田邸跡公園だと聞き、流石に藤田伝三郎とは何者だろうと、正月休みの間に、砂川幸雄氏の著書「藤田伝三郎の雄渾なる生涯」をインターネットで取り寄せドキドキワクワクしながら一気に読破した。

目から鱗、幕末に山口萩の高杉晋作の実家の近くに2歳年下の造り酒屋の四男坊として生まれ、大阪に出てきて一代で巨額の富を得る。贗札事件の容疑者となるも、これも長州派閥の中で活躍する伝三郎らを陥れる薩摩藩の謀略かも・・・の事件の後も、時代が大きく変換する中動物的な直感で、的確に時代の流れを読んで、事業を次々と展開する。途中、贗札事件に巻き込まれながらも、高杉晋作や井上馨や伊藤博文など時代のキーマンと言える人々との縁もからまって、一代で身を起し大阪に居を構え、関西はもとより秋田の小阪や島根の石見銀山、更には岡山の児島湾干拓事業へと手を広げた。

自らが動くのではなく、目利きのできる伝三郎は各事業に適材適所に人を置き、資金を注ぎ込み、その成長を見守った。更にその目利きは趣味の茶道具などの骨董品選びにまで及ぶ。幼い時から身につけた能楽に、お茶は武者小路流、舞は井上流と風流も好み、邸宅内には花畑もあり四季の花を植え楽しみ、起伏に富んだ日本庭園を朝夕に散策し思考し愛でていた趣味人でもあった。豪快に時代の風を切って突き進み的確な判断で乗り切ってきたはずの伝三郎も、事業の継承については子供への思いは断ち切れなかった。事業は、後に日立の基礎を築く久原房之助ではなく、息子に譲ってゆく。死後、千里眼のような伝三郎の「銀行には手を出すな」の遺言とも言える言葉が息子自らによって覆されたとき、実業界を牛耳った藤田家の存続は危機を迎える。カリスマ的な経営者が血縁で事業を継続する難しさは今も同じだ。ただ、唯一幸いなことに、その事業の行く先は他者に委ねられ、戦火で聚楽のようだと称された豪華な本邸や西邸、さらには広大な日本庭園は破壊されたが、死ぬ間際まで拘った茶器を収めた収蔵庫だけは無傷だった。藤田伝三郎の遺品はというなら、自らも建設に注文もつけたという収蔵庫に納められていた五千点のすべてに伝三郎は目を通し選別し息がかかっていたはずだ。

戦火で大阪は貴重な歴史の証言者でもある建物を消失したが、熟塾で10周年の会場に選んだ中央公会堂も船場の相場師岩本栄之助が39歳で自殺し完成をみる事がなかったが、戦災は免れた。死んでも思いが残るから・・・中央公会堂や藤田美術館となった収蔵庫はかつての主の思いを語り続けているのではないか。関西経済界の立役者でありながら、大阪に後世にも続く企業の種を撒き、岡山や秋田にまで事業を広げ、目先の損得ではなく大きな視野で分別した。男性特有の我こそはの自己顕示欲にはこだわらず、頑固に信念を貫き物事の行き先だけを見つめ行動し続ける実業家だった。

藤田伝三郎という人がいた。

「藤田伝三郎の雄渾なる生涯」を読んでしまうと、その庭園や座敷に伝三郎という人の影法師が髣髴と浮かんでくる。是非、藤田伝三郎を大阪人として顕彰したい。まずは新春の講座ではその生活を偲ぶ為に太閤園淀邸に集い、食器を眺め茶室を見学し昼食を挟んで、藤田美術館の藤田清氏を招き、伝三郎氏について講演してもらった。驚いたことに、講演依頼は初めてとのこと。気負いのない話しぶりには好感が持てた。

3月8日から藤田美術館の春季の開館期間でもあり、20日のイベント当日は特別に一般公開されていない西邸であった大阪市公館を見学し、藤田美術館を巡る企画を熟塾で案内する。藤田伝三郎の面影を探しながらの一時を過ごしてその偉業の一旦を垣間見ることによって、明治維新の大阪の活気も感じることができるだろう。

(原田彰子)

10時半に太閤園淀川邸に集合



通された部屋は千利休の茶の師であった堺の茶人、武野紹鷗が部屋の名前となった「紹鷗の間」。往時は男爵邸の「食堂」として使用されていた。

た。太閤園の接客担当支配人の川筋氏よりとパンフレットを見ながら七千坪の築山式回遊庭園を有する敷地内の建物の配置について紹介いただき、各自男爵が揃



えた桜色の洋食器に象牙の柄のフォーク・ナイフセットにバカラではないかという空気のように軽いグラスを手に取り、



伝三郎の故郷山口の塗りの祝い膳はのデザインは鶴亀だが微妙に絵柄が異なり一つとして同じものはないという。庭に出て記念写真を撮った。



その後は、船底天井の書院棟と茶室棟を結ぶ廊下を通り、香雪斎の号を持つ藤田伝三郎が趣向をこらして造営させた茶室「残月」（太閤秀吉が残の月を賞でた事に因んで名付けられた表千家・残月亭の写しの書院茶室）、「萩」（千利休、少庵親子が四畳半から不要なものを省いた二畳半の草庵茶室）、「大炉」（裏千家十一代・精中宗室の考案とされる大炉を備えた六畳敷の座敷で、現在は一尺四寸に改められた）を見学。窓から眺めたお庭はここが大阪の真ん中にあるということをお忘れさせるほどに静かで趣がある。淀川邸の菊の間と、割烹瓢箪のお座敷に別れミニ会席の昼食後、午後1時から本館2階のお部屋で藤田美術館の藤田清氏の講演に興味深く耳を傾けた。

藤田伝三郎の生涯と藤田コレクション

藤田美術館 藤田清

贋札事件で悪名が固定化した藤田伝三郎像

ご紹介いただきました藤田でございます。藤田伝三郎についてお話してくださいというご依頼を受けたときに、実際のところ藤田伝三郎がどんな人間なのかという資料が、本邸があった今ちょうど大阪市藤田邸公園の場所になるのですが、戦争の際大阪空襲で焼けてしまいまして、実際の資料と言うのがほとんど残っていません。そんな中で砂川幸雄氏が書かれた伝記「藤田伝三郎の雄渾なる生涯」でかなり細かく描写なされておりいろんな所から顕彰されていますので、今日はその本の内容にそったお話をさせていただきます。



今日来られ皆様の中で藤田伝三郎以前からご存知だった方は何名様くらいいらっしゃるでしょうか。

結構いらっしゃいますねえ。もっといらっしゃらないと思っていました。ほとんど藤田伝三郎という人間の名前が歴史にほとんど残っておりません。大阪市内ですと男爵だったとか、大邸宅だったとか、太閤園さんで有名とかあるのですが、表舞の歴史に残ったことは何一つ残っていません。では、何故そうってしまったのかと振り返ると、彼が成功した直後、明治12年になるのですが、彼が三十代半ばの頃ですが、皆様ご存知かもしれませんが偽札事件がありまして、一人の男が警察に「藤田伝三郎が経営する藤田組は、井上馨という当時の政治家と組んで偽札を造ったのを私は見たし、藤田家に口止めをされた」と訴えたのです。警察はそれを真に受けて実際に藤田伝三郎を連行して三ヶ月ほど抑留して、結果無罪だったのですねえ。その直後に真犯人が見つかりました。その事件があったことによって、市民や国民から疑いの目を向けられ、講談とか講釈師は面白おかしく、藤田伝三郎は悪い人間だったとか、大酒のみで暴れたとか、そういう悪い話ばかりが残ってしまって、実際のことを顕彰する機会が全くなかったのです。藤田家の人間もほとんど資料が焼けてしまったので伝え聞くしかなかったのですが、砂田さんの著書はよく纏められていてそれに沿って藤田伝三郎という人間を追ってみたら今まで言われてきた伝三郎とは少し違う表情が見えると思います。

萩の造り酒屋の四男坊として誕生

藤田伝三郎が生まれたのは山口県の萩です。たまたま昨年萩に行く機会がありましたので僕の先祖ですし、生誕の地には碑がちゃんと立っていると聞いていました。伺いま

したらだっ広い広場に鉄塔が立っていました。高杉晋作の生家から歩いて5分くらいのところだったのです。高杉晋作は藤田伝三郎が生まれた約2年前に生まれていますので、幼少の時から顔を知っていたらろうし、後々影響を与えるようになったであろうと推察できます。

萩で造り酒屋の四男坊として生まれています。ただ次男を早くに亡くしていますので、長男が鹿太郎・その次が庄三郎ですが久原家の養子に入っていますので久原正三郎になり、その下が藤田伝三郎でした。幼少の頃は父親が厳格だったこともありましてのでかなり勉強に励んだり、家の仕事を手伝わされたりしていたようです。自分のお小遣いを貯めて本を買っていたと聞いています。それが母親にお小遣いをせびって買っていたのを、父親に知れてかなり怒られたとも聞いていますので、かなり勉強熱心だったようです。母親とといいますと、奉仕精神に溢れ、他人に何か困ったことがあるとお金を分け与えたり、食事を作ってあげたりしていたようですので、後々藤田伝三郎が企業への寄付や会社の設立を助けたりすることに繋がっていくかと思えます。

親族の酒屋を建て直し、高杉晋作の騎兵隊を裏で支援

そんな両親の元で育ち、十代後半に叔父が経営していた酒屋があったのですが、叔父さんが若くして亡くなりまだ子供が小さかったのでその財産を一旦本家である藤田伝三郎の家が預かることになりました。預かったのですが、その子供が大きくなったので返してほしいと言ったのですが、伝三郎のお父さんは「君はまだ若いので少し待ちなさい」と言っていたのですが、言っているあいだに伝三郎の父親も亡くなり継ぐと言っていた従兄弟も亡くなってしまいました。母親はそのことを大変気にしているの、伝三郎が「自分がその酒屋を立て直してみせる」と言って三年後には経営は上向きになっていて、支店を三店舗構えてかなりの利益を上げていたようです。その頃にちょうど幕末に差し掛かっていたのですが、先ほど申し上げた高杉晋作は29歳で死ぬまで日本を動かした人物の一人でしたが、彼に直接師事していたわけではなく、影から援助をしていたと言われてます。表立って応援すると命を狙われる可能性があったので、裏で資金の援助をしたのだろと考えられています。いろんな所で、騎兵隊に入っていたとかという話が聞かれますが、これは聞いた話なので定かではないのですが、騎兵隊に入ろうかと思ったけれどあまり争い事が好きではなかったようです。それならば、財力で援助をしようと実際には入らなかったと伝わっています。

大阪に出て、高麗橋建設や軍人用の革靴を手がける

明治元年にはすでに伝三郎は結婚していて、明治2年には長男の平太郎が生まれています。結婚してすぐに大阪に出てきています。大阪に出てきたのは、もともとはヨーロッパに行きたかったのとお金を持って出てきたのですが、一回目は母親に早く帰ってこいと言われてすごく一旦

萩に戻りました。二回目に大阪に出た時に、山口県の長州の陸軍局が廃止され払い下げられた武器弾薬類を持って大阪に出て販売し、ヨーロッパに行く資金にしたようです。資金は稼いだのですが、船が出なかつたので、することがなく大阪でウロウロしていた伝三郎に、仕事をしないかともちかけたのが井上馨や当時日本政府を動かしていた中心人物たちだったのです。

一番に声をかけたのは、大阪の高麗橋を作ってくれということでした。高麗橋は当時日本でも十本の指に入るような大きな橋ですし、かなり重要な拠点として知られていたのですが、これを日本で三番目に鉄で作ったのが藤田の最初の事業だと言われてます。これで巨万の富を得たかと言うとそうではないのです。この時は伝三郎が二十歳過ぎ頃の話ですので、まだお金もそんなに持っていませんし、成功したとは言い難かったのです。ただこの橋の事業を手がかりにその次に鉄道を引くことになります。これは大阪から京都の間に鉄道を引いたと言われてますが、この線が今どうなっているのはわからないのですが、この鉄道を彼の人生を大きく変えた一つでもあるのですが、今の阪堺鉄道ですが、日本で初めての民間の電鉄会社でした。その成功を見て、阪神間ですと、有名なのは小林一三さんの阪急電鉄とか私鉄の先駆けになりました。

それと同時に当時軍隊があったのですが、草鞋をはいて戦いをしていたので、それを伝三郎が見て草鞋ではいけないあ、革靴を作ろうと思いつきます。革靴とか革製品の製造は江戸時代にはすごく嫌われた業界だったのですが、伝三郎や当時活躍されていた大蔵喜八郎さんが、西洋化にあわせ靴業界のきっちりした基盤を作ろうと軍の靴を作る革製品の革製品の会社を起こします。大蔵喜八郎が起こした革靴屋と藤田伝三郎が起こした革靴屋がくっついてそれが流れ流れて一緒になって今の「リーガル」という会社になっていきます。西南戦争ではかなりの革靴の受注を受けて伝三郎は巨万の富を得ます。

薩摩の謀略か?! 贋札事件の容疑者として逮捕される

その頃に偽札事件で捕まってしまうのですが、これは長洲出身で井上馨と仲がいい、今でも成功した方が政治家と一緒にいるとたいがい繋がっているように疑われ新聞記者や世間の人々からもあまり良い印象を持たれないのに乗じて、薩摩出身者からはめられたのではといわれています。実際に伝三郎が偽札を造ったのかといえば、真実はわからないのですが、恐らく造っていないと思います。当時出回った偽札と言うのが二円札で、今で換算すると二万円札ですが、当時伝三郎は毎月数千円、今の数百万円の収入がありまし、井上馨も年収が数千円、今日の数千万円の収入があったので、二円札を偽造する必要はありませんでした。真犯人を探すと熊本長庵という人が捕まるのですが、犯人は一説によると校長先生だったとか、医者だったとか、画家だったとか言われているのですが、この犯人の名前が当時流行っていた小説の人物とかぎりなく近い名前なの

です。それを聞いて世間の人は、伝三郎はお金を使って事件をもみ消すために犯人をでっちあげだと言われました。今になってもその話は消えることがなくて、松本清張さんもそんな小説を書いていて、話の内容は面白かったのですが、そんな有名な方がその事件を取り上げるのだなと思いました。

当時は贗札事件に手を出すほど困っていなかったのですが、世間に対して藤田伝三郎の印象を固定化してしまったようでした。それが後々まで響いて、伝三郎はその後何社か会社を起こすのですが、代表者になっていない会社が多くつもあります。世間の目を考えて、自分は取締役あるいは監査役にひいて、代表取締役には自分の兄である久原庄三郎であったり、鹿太郎にしていました。

土木建築業から鉱山事業へ

次の転機は、手がけていた土木建築業が軌道にのって大事業をいくつも請け負うようになりかなり大きくなってきました。そうなってくるとかなり大変になってきました。当時の事業は梅田にビルを建てるような規模ではなくては、佐世保に港を作りましょう。呉に軍港をつくりましょうという事業ばかりでした。そうなると一社ではたいへんなので大蔵喜八郎がやっていた大蔵組と共同でやるようになります。これが明治 20 年に合併して「日本土木会社」となり、日本赤十字病院とか帝国ホテルを作り、会社が大きく膨れ上がりました。その時に藤田伝三郎は自分の権利を売り、合併したときに靴会社も大蔵喜八郎の会社と一緒に買ったので、靴と土木の権利を売りました。売ったら何も残らないじゃないかということになるのですが、その数年前に伝三郎は、これからは鉱山だということで小坂鉱山と石見銀山を購入していました。石見銀山は後々経営に行き詰まって手放すことになるのですが、国からの払い下げで銀山を買いました。小坂の銀山の産出量は、国が経営していた頃より伝三郎がお金をつぎ込んで設備を改善し経営するようになって 5 倍から 6 倍の生産量になり、伝三郎の手がけた一番大きな事業であり一番利益を得た事業となります。

銀山を保有しながら伊藤博文に金本位制を提言

伝三郎が銀山を手に入れた時、日本は貨幣価値を金にするか銀にするか揉めていた頃でした。圧倒的に銀にしようという声の方が多かったのです。銀山を持っていた伝三郎はわざわざ伊藤博文のところへ自ら出向き、「金にしろ。これからの日本を考えると金本位だ」と言ったそうです。その一言で日本が金本位に変わっていったそうです。金本位になると、どうなるかということ、銀が売れないのです。それが原因で、小坂銀山の経営がかなり傾いてしまいます。銀は産出量もどれだけ埋まっているのかも最初からわかっていますので数年で底をつくと分かっているのですが、小坂銀山からは銀以外にもいろんな物質が混ざった黒い塊がでてくるんですね。それを精錬方法を開発すれば儲か

るのではないかということにつこんだお金が当時百六十万円程ありました。今で換算すると数百億円のお金をかけたこととなります。お金をかけたばかりに、井上馨さんからかなり怒られています。私生活まで管理され、一日いくらで生活しないさい、おかずは一品へらしなさい、骨董品は買うな、服は買うな、家の立替は絶対してはいけない、寄付もしてはいけない、月給は一日いくらかなどとかなり細かく決められました。なぜそんなに井上馨が細かく決めたかと言うと、当時伝三郎は毛利家から一回二十万円、今で言う二十億円近くの大金を借金をしていたにもかかわらず、寄付をしているのです。毛利家と借金をする時にはいったのが、井上馨だったのです。だから、間に入った井上馨からすれば、借金しているのに何故寄付ばかりしたり、骨董品の茶碗ばかり買っているのかとすごく怒りました。毛利家からも怒られて、経営の傾いた小坂鉱山を売らなさいといわれたのです。伝三郎は反発はしなかったのですが、どうにかしようと考えていたところ、後に日立を創業し政界にも打って出るような久原房之助を森村組からひっぱってきていたのですが伝三郎と同様にやればできると思っているの、井上馨のところに行き小坂だけはどうにか残してくれ、自分に任せてほしいと嘆願し、房之助その黒い塊から銅を低コストで採る技術を開発します。これによりいままでにないほどのお金が伝三郎のところにはいつてくるようになりました。どういうことかということ、経済が上向きになると今までとは比べようもないようなほどのお金が入ってくるようになったのですが、これを伝三郎は何を考えたのか岡山の子島湾の干拓にまわすようになりました。岡山では藤田伝三郎のことが教科書に載っているといわれてこの前びっくりしました。この事業はもと岡山県とか市が手がけようとした事業だったのですが、採算がまったくとれない事業だったのですが、伝三郎はこの事業を是非やりたいといいだし、最後には調停までして俺がやると言ってやり通した事業でした。結局完成したのは、伝三郎が亡くなった後になるのです。

長男平太郎が手を出した銀行経営が破綻

伝三郎の後を誰が継ぐかと言うと、房之助は誰が見ても一番有能で事業を継ぐのは彼だろうと思われていたのですが、やはり伝三郎も人の親なのか、実の子の長男の藤田平三郎にすべてを譲ったのです。藤田伝三郎は凄く先が見えるし、人には厳しく細かいことまで指示をだして一人一人に責任を感じさせるように仕事の指示を与えていたそれだけの人間が、最後の最後で人間味が感じられるのですが、息子にすべてを譲り、房之助が藤田の元を離れていったことによって伝三郎亡き後の藤田組の雰囲気がいかに変わっていったようです。

伝三郎は自分たちでは銀行をやってはいけない、手を出してはいけないと言っていたのですが、長男平太郎が銀行を経営し、世界的な経済恐慌の煽りをうけて伝三郎が手がけた企業が吸収されてしまいます。伝三郎が手がけた企業

は、関西電力・琵琶湖汽船・阪堺電鉄・南海電鉄・リーガル・大阪毎日新聞などの企業がすべて藤田の手から離れていくのです。何故そうなったのかという、経済恐慌の煽りをうけ物価が上昇したり、人件費の高騰などいろんなことが重なったともいえますが、当時藤田の家では一日百円かかりました。何故一日今で言う百万円使っていたかという、ほとんどが人件費なんですね。大阪の本宅・京都・箱根・熱海・東京の椿山荘という別荘を持っていました。また先ほど広間でご覧いただいた食器類のうち、とても薄いコップがバカラかもしれないというものがありました。大阪の古美術商で日本で始めてバカラを取り扱った店で藤田家とも出入りがありましたので、そこから買ったであろうとされています。

井上馨と競った道具集め

明治の混乱期には、海外から陶器が入ってきましたが、日本の骨董品が海外に出て行くのを惜しんだ伝三郎は寺院等に多額の寄付をしていたようで、そのお礼に様々な寺院から石仏などが寄贈されています。名目上は寺院からの寄贈でしたが、伝三郎も寄付をしていますのでそれが売買だったかは定かではありません。よく言われるのは、伝三郎はよく骨董品を買いあさり、札束を持って行ってこれをやるからお寺のものを買いあさっていたと言われてますがそうではありません。今美術館の前に多宝塔があるのですが、これは高野山にあったもので古いので取り壊すという話を聞き新しい塔を建て直すための寄付をして、古い塔は引き受けると言って本宅内に移築して再生させました。幕末の混乱期に寺院に寄付する方は何人かあったようですが、明治維新で江戸時代の豪商の多くは姿を消し、大阪でそれだけの財力を持っていたのは伝三郎だけだったようです。

伝三郎は美術品を多く収集し、明治17年にはお茶会を開いています。その時に、今も藤田美術館にある3年に一度出展するような有名なお茶碗なのですが、すでに伝三郎の手元にあったということになると成功してすぐに道具を買い集めだしたようです。このことについては井上馨さんにもさんざん「道具を買うな」と怒られていまして、何故かという井上さんも道具が好きなんですね。自分が欲しい物を伝三郎が買ってしまうので、藤田家に来ては「これ持って帰るぞ」と言って勝手に持って帰るので、井上馨が来る時は、いい物はしまっちょと欠けている物などを飾っていたようです。

伝三郎の豪快な道具な購入方

伝三郎の骨董品の買い方がかなり豪快でして、古美術商の人が今で言うオークションでめぼしい物を競り落として買うのですが、一度に二十以上買う骨董商の方もいるのですが、買った物をすぐに伝三郎のところに持ち込みました。何故かと言うと、買ったものを全て言い値で買ってくれるのです。古美術商からしたらこんない話はありませ

ん。ただそこに落とし穴がありまして、「言い値でいいから置いていきなさい」と言って帰ろうとするところを一つ一つ目の前で開けて、そして「これは一番の蔵、これは二番の蔵、これは四番の蔵」と仕分けされたのであまり悪い物を持っていけない。古美術商も目利きができないと藤田家には出入りできない。売ってすべて「四の蔵」などと言われれば出入りできなくなってしまいます。入れる古美術商はかなり少なかったようです。ただ持ってくるのと全て言い値で買ってくれるのは何故だろうと古美術商の方が聞いてみたら、「これしか買わないと言えば同じようなものばかり持ってくる。なので、全て買えばいろんな物を持ち込むでしょう。」ということでした。そんな理屈があるのかと思いますが、伝三郎も初めは失敗して価値のないものを買っていたようですが、明治の末になるといろんな方が鑑定してくれと道具を持参されたようですので、かなり目がこえてこれは良い、これは悪いという目利きができたようです。

死ぬ間際まで拘った幻の茶会の為の大亀香合

藤田美術館の開館が昭和29年なのですが、60年近く前なのですが、一度蔵の中のものを整理しようということで、文化庁の方や大学の学者の方達と鑑定したのですが、伝三郎が分けたままだったそうです。伝三郎が骨董品に使ったのが一度で二〜三十億円という事もありました。一番高額と思われる美術品は、話に残っているのは、死ぬ間際に交趾焼という明から清代にかけての中国の焼物で「大亀香合」という亀の形をした香炉が昔の形物香合相撲という番付が一番いいものだといわれているものです。伝三郎はこれがどうしても欲しかったのです。オークションにでると聞いて今も大阪にお店のある戸田商店さんに伝三郎は「君に任せ」と病の床にありながらも依頼し、何が何でも落札しようと九万、今で言う十億円近い値で競り落としたのですが、これは前代未聞の出来事で、新聞各社の一面に「藤田家九万円で落札」と騒がれました。伝三郎はそれだけ拘った香炉の落札の知らせを聞いてそのまま息を引き取ったと言われてます。死ぬ間際まで道具を集めるという伝三郎の執念を感じます。

なぜその大亀香合に拘ったかと言うと、本人には是非やりたかったお茶会があって、札幌ビールと朝日ビールの元になる大日本麦酒会社を作りビール王といわれた馬越恭平をさんざん酔っ払わせて酔っぱらった勢いで田村文琳茶入という有名なお茶入れを買うのですが、ある時馬越さんからあのお茶入れでお茶を一服いただきたいと言われると「亀が手元に来てからだ」とずっと言い続けていたと言われてます。大亀香合と田村文琳のお茶入れを使ってお茶会をしたかったのです。ただその時に他の道具に何を持ってきたのかは今となってはわかりませんが、その二つが並んだお茶会となると、お茶をされている方はお分かりかと思いますがとんでもないお茶会でして、落ち着いてお茶を飲めないようなお茶会なのですが、伝三郎はそ

れをやろうとしていたのです。

お茶にはたいへん傾倒してしまっていて、本邸の中には十近いお茶室があり来客を持て成していたのですが、最後には日本の経済界ばかりか政界にも口をだすようになっていましたし、総理大臣を決める権限まで持つ勢いですが、贗札事件以後、家からほとんど出なくなり、朝から晩までいろんな人がくるものですからお茶室を造ったようですが、持て成すのにそんなにお茶室が必要だったのかということですが、お茶室の能舞台も使っていたようです。先ほどの馬越恭平を酔わせたといいましたが、人が来ると本邸内にある能舞台で伝三郎がお能を披露しもてなしたようでした。お茶やお能に、お香もやっていたようですが、これは定かではないのですが先生が女性の方で、途中で意見が合わなくなってやめてしまったようです。

時代の変革期だからこそチャンスをつかんだ伝三郎

様々なことに惜しげもなくお金を注ぎ込み、日本の将来を思って学校を創ったり、いろんな産業についてお金を注ぎ込んでいます。

鉄道や干拓などそれ自体では採算のとれない事業も数多くあるのですが、それを儲けようと手がけたわけではなく、この国がよくなればいい、日本がもっと大きくなればいいと仕事をやってきました。邸宅の跡をみると一概にはいえませんが……。こんな大きな家を造って欲がなかったとはいき切れないのですが、伝三郎は目先の利益や自分の損得だけではなく、日本の将来も視野に入れて仕事をしていたと思います。その拠点を何故東京ではなく大阪にしたのかということ、いろんな説があるのですが、

一番確かなのは東京には長州出身の政治家が一杯いてその方たちの世話を焼くのはならぬとか細かいことに口出しされるのを嫌ったようですが、実業界に没頭できる場所として大阪を選んだと思います。そういう意味では大阪の立地条件は海も近いし川が通って流通もしっかりしており江戸時代からの商都としての土壌もありうってつけの場所ではあったのですが、江戸から明治へと時代の変革期で大阪が落ち込んでいた時期でもありました。だからこそ、チャンスもあったと思います。今の日本も落ち込んだ空気をもっているようなので、何か壊れた後の隙間から伝三郎のような人が育っていけば面白いのになあと思います。

今回藤田伝三郎についてのお話をご依頼いただいたときに、藤田伝三郎はほとんど歴史的には何も残さないまま埋もれてしまった人なのですが、そういう人を振り返ってみようという動きがあることが、大事なんじゃないのかなあと思っています。伝三郎が深くかかわってきた小坂や山口県の萩や岡山の児島の藤田では、伝三郎の顕彰が進みつつあります。

萩でも生誕の地の鉄塔をどうにかしようとか、整備して公園にしようという話ができていますし、山口では「藤田伝三郎」という銘柄のお酒が出ています。岡山でも「でん」というお酒が藤田伝三郎を顕彰するために出されています。岡山からそのお酒を造った方がこられて、「大阪では何故藤田伝三郎の人気のないのですか。もっと広めてください。」とおっしゃられていました。たまたまこの時期になってなのかもしれませんが、各地域で顕彰されており、萩に伝三郎は三万円を「決して使うな」と言って寄付しているのです。「決して使うな」とはどういうことかと思われるのですが、三万円を運用して困った人にあげなさいと付け加えたそうです。それは現金ではなく物であったり事業を展開する資金にしなさいと言ったようです。萩市には伝三郎の寄付したお金がまだあるそうです。生誕地もあのままでは良くないのでどうにかしますとお話されていました。今各地で藤田伝三郎を顕彰する動きが少しずつ出てきていますが、幕末維新を生きた凄い人物がこうして忘れられていくのが少し寂しい気がします。

今日こうして伝三郎の話をしていただき、3月20日にも催しがあるということで、身近にそういう人物がいたということをお阪の方が知っていただけて興味をもていただければ、藤田家の人間としても大変嬉しく思います。私は藤田美術館にありますが、3月8日から春季の展示が始まり、藤田伝三郎が愛用した道具も多くでておりますので、この機会に是非ご覧いただければと思います。



参加者:

一般:岩本靖子・奥田英智・金子・北原吉朗・佐伯恵美子・佐藤允・辰野元彦・中島圓・西田・三輪なおみ
塾生:秋山建人・井上章・大川忠・大森史子・木村正治・鍛冶睦子・熊谷京子・小林伊一・小林和子・下野和子・下野譲・杉山英三・田中稔三・中村京子・中村孝夫・原田彰子・浜田真弓・東口恵子・堀結美子・堀内紀江・宮本麗子・宮本雅彦・森欣子・森田秀朗・米川俊三

(アイウエオ順・敬称略)